

尿病に、急性脂肪肝を始めとした多種多様の病態を呈した症例であるが、臨床報告例も少なく興味深いため報告した。

#### 4) 血球貪食症候群の肝機能に関する検討

阿部 裕樹・渡辺 徹  
上原由美子・吉川 秀人  
坂野 忠司・阿部 時也 (新潟市民病院)  
小田 良彦 (小児科)  
畑 耕治郎 (同 消化器科)

血球貪食症候群は、感染症、悪性腫瘍などに合併し、神経症状、血球減少、凝固能障害、肝機能障害などの多彩な症状を示す。今回我々は、当科で経験した血球貪食症候群の10例について肝機能障害を中心に検討したので報告する。

10例の基礎疾患は、ウイルス関連性血球貪食症候群が6例、悪性腫瘍関連性血球貪食症候群が1例、原因不明が3例であった。

これらの10例は、いずれも GOT 優位の肝トランスアミナーゼの上昇を認めた。肝機能障害の程度は背景疾患により様々であった。また肝機能障害の強い症例では、血清フェリチンが高値である傾向が認められた。

血球貪食症候群では、血清フェリチンは網内系細胞の活性化を反映すると考えられており、今回の検討で、網内系細胞が強く活性化されている症例では、強い肝機能障害が起こる可能性が示唆されると考えられた。

#### 5) 肝組織像の改善を確認しえたウイルス関連血球貪食症候群の一例

阿部 行宏・畑 耕治郎  
黒田 兼・五十嵐健太郎 (新潟市民病院)  
何 汝朝・月岡 恵 (消化器科)

症例は30歳男性。平成12年2月7日より発熱、悪寒が出現。2月12日より食欲不振となり、2月14日当院を受診し、この時インフルエンザが疑われ内服投与を開始した。しかし症状は改善せず2月21日肝機能障害が認められ、同日入院した。2月22日骨髓検査にて血球貪食像を認め、さらに EBV-VCA-IgM が陽性であり、EBウイルス起因の VAHS と診断した。さらに肝生検にて高度のリンパ球浸潤、CD68陽性細胞の増生、グリソン鞘中心の肉芽腫形成が認められた。その後、無治療にて徐々に軽快し、3月21日再度肝生検を施行した。一部肉芽腫形成残存しているが、リンパ球浸潤の軽減が認め

られた。症状、臨床検査所見も改善し、3月29日退院した。

本例の経過は Self Limited であり EB ウイルス感染による反応性の VAHS であったと考えられる。

#### 6) Hepatic glomerulosclerosis を合併した肝外性門脈閉塞症の1例

渡辺 徹 (新潟市民病院)  
小児科  
新田 幸壽 (同 小児外科)  
畑 耕治郎 (同 消化器科)

【はじめに】肝外性門脈閉塞症に腎病変を合併した1例を経験した。

【症例】13才の女兒。7才時に肝外性門脈閉塞症の診断で、食道離断・摘脾・胃血管結紮術施行。今回、発熱、下痢、意識障害、全身浮腫のため当科入院。昏睡、全身浮腫、腹水を認めた。検査所見では、低蛋白血症、血尿・蛋白尿、アンモニアの上昇、ICG クリアランスの低下を認めた。便培養より緑膿菌が検出され、大腸炎、portal-systemic encephalopathy と診断した。抗生剤、利尿剤投与で改善したが、血尿・蛋白尿が持続するため、腎生検を施行し、Hepatic glomerulosclerosis と診断した。その後 ICG クリアランスの改善に伴い、尿所見は正常化した。

【まとめ】ICG クリアランスの改善に伴い尿所見が正常化したことから、本症例の腎障害は感染に伴う一過性の免疫複合体の増加・処理機能の低下により生じたものと思われた。

#### 7) 当院における B 型劇症肝炎の検討

黒田 兼・畑 耕治郎  
五十嵐健太郎・何 汝朝 (新潟市民病院)  
月岡 恵 (消化器科)

1981年から99年まで当院に入院した B 型劇症肝炎9例について検討した。男性5例、女性4例、年齢17歳から75歳。初感染5例、キャリア発症4例。入院時、死亡例群で GPT、T-Bil が高く、PT が低下、Cr、BUN の上昇を認め、また血小板数も低下していた。ウイルスマーカーは初感染例でも入院時すでに HBe 抗原抗体がセロコンバージョンしていた。preC 領域 W/M 比は、初感染死亡例で80から100%が変異株であった。全例に血症交換が行われ、ステロイドは死亡例は全例に

投与されていた。CHDF および肝移植は施行されなかった。与芝らの式を用いた劇症化予測では1例を除き一致。予後予測は高橋らの式、武藤らの式、脳死肝移植適応評価委員会のガイドラインを用いて検討した。現在の予測法を組み合わせればかなり正確な予想が可能と思われる。

8) モノクローナル抗体を用いた HBV genotyping

高橋 達・渡辺 孝治  
高橋 澄雄・大越 章吾 (新潟大学)  
市田 隆文・朝倉 均 (第3内科)

新しく開発された、モノクローナル抗体を用いた HBV ゲノタイプ EIA キットを用いて当科で経験した B 型慢性肝疾患94例の遺伝子型を決定し、臨床像との関連を検討した。判定不能は1例のみで、93例、98.9%に遺伝子型が決定可能であった。遺伝子型は C 型 80.8%、B 型 18.1%で、年齢、男女比の差はなかった。無症候性 HBV キャリアーでは B 型が多く、より病変の進展した例ほど C 型が多かった。また、e 抗原陽性例に C 型が多く、e 抗体陽性例に B 型が多かった。新犬山の F 因子は C 型で高値であり、HAI スコアのカテゴリー I、III、IV が C 型で高値、カテゴリー II が B 型で高値であった。以上の結果から、今後は遺伝子型と、コアプロモーター/プレコア変異との関係を検討する必要があると考えられた。

9) 当院における A 型肝炎発症状況の検討

内藤 彰・田村 康  
窪田 智之・白井 大悟  
時光 善温・藤原 敬人 (県立中央病院)  
山崎 国男 (内科)  
青柳 豊 (新潟大学)  
第三内科

【目的・対象】1980 - 1999 年の当院における急性 A 型肝炎による入院患者68名 (M35, F33) 平均 38.6 ± 11.9 歳 (mean ± SD, 14 - 68 歳) につき検討を行い、疫学変化、加齢変化の検討を行った。

【結果】年度別発症患者数では '84, 90, 91 年に流行年の存在を認めた。月別発症患者数では 2, 3 月をピークに発生の集中を認め、近年の季節性消失は認めなかった。発症年齢は 80 年代 34.1 ± 12.5 歳、90 年代 41.5 ± 10.7 歳 (p < 0.05) と上昇を認め、40 歳代にピークが移行した。各検査項目の検討では、加齢に伴い GPT 正常化

日数延長、TB 最高値の上昇傾向を認め、%PT 最低値は低下傾向を認めた。加齢と、GPT 最高値、TB 正常化日数間には相関関係を認めなかった。

【考察】今後、集団発生、重症化例の増加が危惧され、ワクチンの使用も考慮すべきである。

10) 重症型急性 A 型肝炎の 1 例

白井 大悟・窪田 智之  
時光 善温・内藤 彰 (県立中央病院)  
藤原 敬人・山崎 国男 (内科)

急性肝炎の中には、プロトロンビン時間 (PT) が 40%以下を示しながら明らかな肝性脳症をみない急性肝炎重症型 (AHS) がある。

症例は 38 歳の男性、'98 年 10 月生がきを摂取、11/2 より全身倦怠感、悪心、嘔吐、高度の肝機能異常を認め、11/6 当院紹介受診となった。入院時の疫学不明な段階での予後計算を与芝の式で行ったところ 67% の劇症化が予測された。IVH 穿刺部位などから出血が持続し、入院後 6 時間の %PT の再検では、6.1% の急速な低下を認めたため、同夜より血漿交換療法を中心とした集学治療開始、4 回の血漿交換にて肝機能の改善傾向を認めた。後日判明の IgM 型抗 HA 抗体は陽性であった。劇症肝炎への移行が高率に予測される場合、早期積極的な治療が重要であると思われる。

11) PBC - AIH overlap 症候群の 2 例

小林 由夏・横田 隆司  
倉岡 賢輔・松林 宏行 (立川総合病院)  
飯利 孝雄・七條 公利 (消化器内科)

症例は 66 才女性。黄疸を主訴に、平成 11 年 12 月当科入院となった。検査所見上 t-Bil 5.8 mg/dl, GOT 236 U/l, GPT 263 U/l, ALP 1127 U/l, LDH 1360 U/l, γ-GTP 791 U/l の上昇をみとめ、ANA 1280 X, AMA 160 X 陽性であった。腹部 CT 上肝両葉の腫大をみとめ、慢性肝疾患と考えられた。

肝生検組織にて、門脈の線維化、胆管消失、小円形細胞浸潤、小葉内の piecemeal necrosis をみとめ、組織学的に PBC - AIH overlap 症候群と診断した。

UDCA 600 mg/day, bezafibrate 400 mg/day に加えて、overlap 症候群の 5 割強に有効とされる corticosteroid 療法を導入した。PSL 20 mg/day より開始し、現在 10 mg/day に tapering しつつ投与中であるが、